（4）鳥類

現在までに確認されている鳥類は約 110 種を数える。山林が多いため、その大部分が山鳥である。そして、この中には天然記念物のイヌワシをはじめオシドリなど貴重な鳥類が多く含まれており、自然の質の高さを示すシンボル的存在である。

・イヌワシ（御池岳、霊仙岳）
・オシドリ（犬上川上流の川岸、犬上ダム、芹川ダム）
・クマタカ（大君ヶ畑地区）
・ヤマセミ（犬上川上流部）

[写真 2-20] クマタカ

[写真 2-21] オシドリ

犬上ダムの近くには、野鳥観察小屋（2 棟）、野鳥展示資料館が設けられ、ダム近辺や渓谷では野鳥観察に訪れる人たちが多い。芹川ダム湖畔の滋賀県野鳥の森ビジターセンターは平成 8 年（2009）閉館したが、現在も野鳥観察の場として広く知られている。

（5）哺乳類

山地帯には天然記念物のニホンカモシカのほか、シカ・サル・イノシシ・キツネ・タヌキ・アナグマ・テン・ムササビ・ノウサギなど多数の哺乳動物が生息している。

・ニホンカモシカ（国指定特別天然記念物）（霊仙山、御池岳）
・シカ（芹川ダム、犬上ダム周辺部、梨ノ木地区付近）
・コウモリ類（河内の風穴、佐目の風穴）

[写真 2-22] 河内の風穴のコウモリ

[写真 2-23] ニホンカモシカ

（6）洞穴性生物

石灰岩地の洞穴には固有の洞穴性生物など貴重な生物が多く確認されている。例えば、河内の風穴のカワチメクラチビゴミムシ、コバヤシミジンツボ、佐目の風穴のサメメクラチビゴミムシ、スズカメクラツチカニムシなどである。

第６項　岩石・鉱物・化石

(1) 岩石

滋賀県の石として認定された湖東流紋岩は萱原地区の深谷林道から研究が始まった歴史があり、多賀町は県の石の誕生の地であるといえる。湖東流紋岩という名称は、「湖東地域に分布する流紋岩（地表に噴出したマグマを起源とし、SiO_2（二酸化ケイ素）の多い岩石)」という意味でつけられたもので、成因から「溶結凝灰岩、花崗斑岩、石英斑岩」に分類される。町内で湖東流紋岩が広く分布するのは八尾山周辺で、観察するのに最も適した場所としては大瀧神社のそばを流れる犬上川河床である。

[写真 2-24] 大瀧神社の犬上川河床

石灰岩は芹川上流の霊仙山から犬上川上流の佐目・川相地域に広く分布する。芹川が平野に流れ出た久徳から中川原付近には多量の石灰岩礫が運ばれ、川原一帯が白く見える。それを白壁の原料として 12 世紀の頃から使用されていたことは古文書から明らかにされている。明治以降は企業によって山間部の石灰岩が採掘され、セメント産業として町の活性化に貢献した岩石である。また、石灰岩が最も広く分布する霊仙山一帯は河内風穴をはじめカレンフェルドやドリーネといった西日本最大のカルスト地形を形成している。

[写真 2-25] 多賀鉱山から運ばれた石灰岩の貯鉱場

(2) 鉱物

産出する鉱物としては石灰岩に伴って析出した方解石がよく知られ、30cm を超える塊も産出する。方解石は硬度が小さく宝石には適さないが形状が多様で美しく、中でも住友大阪セメント多賀鉱山の陣笠状方解石（じんかさじょうほうかいせき）は透明度が高く形状が美しくて鉱物収集家には広く知られている。その他、同鉱山では様々な形状の方解石やそれと合わせて鍾乳石が発見されることも多い。鈴鹿山系には江戸時代から数多くの鉱山が開鉱されていた。特に、鈴鹿花崗岩を主とした火成活動に伴って形成された接触交代鉱床や鉱脈型鉱床が多く、黄鉄鉱（おうてっこう）、磁硫鉄鉱（じりゅうてっこう）、黄銅鉱（おうどうこう）、方鉛鉱（ほうえんこう）、閃亜鉛鉱（せんあえんこう）、マンガン鉱などの鉱石鉱物が産出した。しかし、これらの鉱山は現東近江市で、多賀町では鈴鹿花崗岩から離れ鉱山は少なく、わずかに萱原において採掘されていた鉱

[写真 2-26] 陳笠状方解石　40 × 40cm

[写真 2-27] 犬上鉱山跡（富之尾地区）

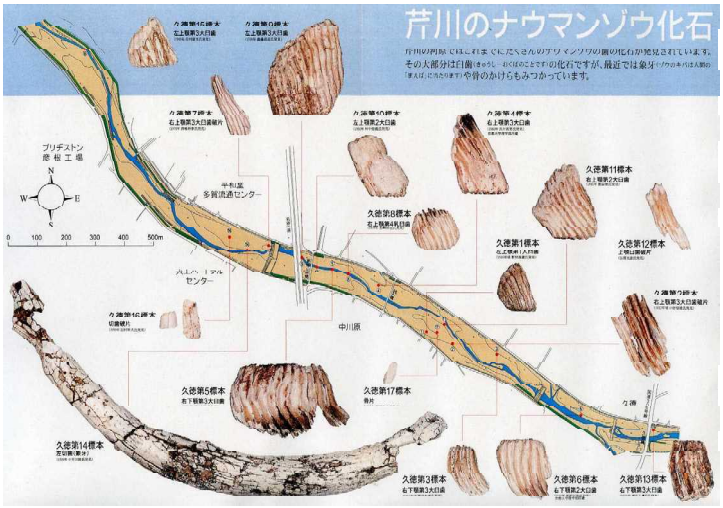
石鉱物が二酸化マンガンやケイ酸マンガンである。

また、鉱山としては富之尾地区や四手地区に亜炭鉱山があり、戦後しばらく亜炭を採取し稼業していた。多賀町の亜炭は約 180 万年前の樹木が炭化したもので十分に炭化していない木質部が多く質の悪い石炭であった。その他の鉱物としては水晶が記録されているが、花崗斑岩に伴なう鉱脈にそって晶出したもので数ミリ程度のものが大部分である。

（3）化石

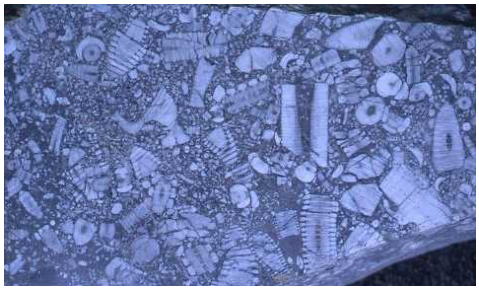
化石の歴史は大正５年（1916）に芹川の中川原地区の河原で発見された動物の歯に始まる。この頃は日本の化石研究は緒についたばかりで、この歯がナウマンゾウの臼歯であると分かる迄に約 20 年を要した。その後、小学生から大人まで地元の人々によって次々に発見され、現在では 17 個に達している。中でも、平成 10 年（1998）11 月に名神高速道路橋脚の下流約 300 m の地点で発見された切歯（牙）は長さが２mを越え、全国のナウマンゾウ切歯で３番目に長い立派な化石である。［図 2-13］のように地図上に化石の写真とともに発見地点を表現してみると、久徳橋上流から名神高速道下流までの約 1.5 ｋmの間に集中していることがわかる。ナウマンゾウ化石は全国各地約 200 箇所から発見されているが、１つの地域から多数見つかっている地域は長野県の野尻湖、北海道の忠類村、茨城県の花室川に限られている。多賀町はそれらナウマンゾウ化石の発見や研究の先進地の仲間に入る地域といえる。

ナウマンゾウ化石の産地として知られるようになって、およそ半世紀を過ぎた平成５年（1993）、四手の丘陵においてアケボノゾウ化石が発見された。ナウマンゾウが多賀町に生息していたのは約３万年前と分かっているが、アケボノゾウはそれより遙かに古い約 180 万年前のゾウである。同じ時代のアケボノゾウ化石は全国でも発見されているが、多賀の化石の重要性は、全身の骨の約７割が見つかったことである。多賀町始まって以来の発掘調査やその後の復元骨格の制作、そして博物館建設と進んだ。現在、アケボノゾウ全身復元骨格は町の文化財に指定され、博物館で観覧できるようになっている。権現谷周辺でも沢山の化石がみつかる。権現谷の化石はゾウの時代より遙か昔の約２億年前の時代のものでフズリナ、ウミユリ、サンゴ、二枚貝そして小さいが三葉虫も採取される。



［図 2-13］ナウマンゾウ化石の発見地点

［写真 2-28］アケボノゾウの復元全身骨格



［写真 2-29］サンゴやウミユリが密集した石灰岩

第７項　風穴

(1) 河内の風穴

芹川上流に位置する河内地区周辺には、古生代ペルム紀（約２億 8,000 万年前）の海山断片に由来する石灰岩が広く分布している。この石灰岩には、四射サンゴやフズリナ、三葉虫などの化石が含まれている。

このような石灰岩が分布している地域では、カルストと呼ばれるドリーネやカレンフェルド、鍾乳洞などの特徴的な地形が随所で見られ、生物相も含めて独特な自然環境を形成してきた。河内の風穴は環境省が選定した日本の重要湿地 500 箇所のうちの１つであり、滋賀県指定の天然記念物でもある。

カルスト地帯の、芹川支流のエチガ谷沿いの岸壁に位置する鍾乳洞が河内の風穴である。これまでに確認されている河内の風穴の総延長は約 10,020 m（全国第３位）で、その全貌はいまだ明らかになっておらず、現在も調査が進められている。

一般公開されているのは通路の整備されている 200 m地点までとなっているが、深部には地底湖や鍾乳石の林立した箇所もあり、洞内を流れる地下河川の水が芹川のエチガ谷へと湧き出している。

洞内の気温は１年を通じて 11 ～ 12℃と安定しており、90％以上の高い湿度が保たれている。

洞内には、太陽光の届かない環境に生息するヤスデ類やクモ類、ヨコエビ類、トビムシ類などの生物が生息し、固有種のコバヤシミジンツボ、カワチメクラチビゴミムシも広く知られている。ユビナガコウモリ、コキクガシラコウモリといったコウモリ類が数多く確認されている。

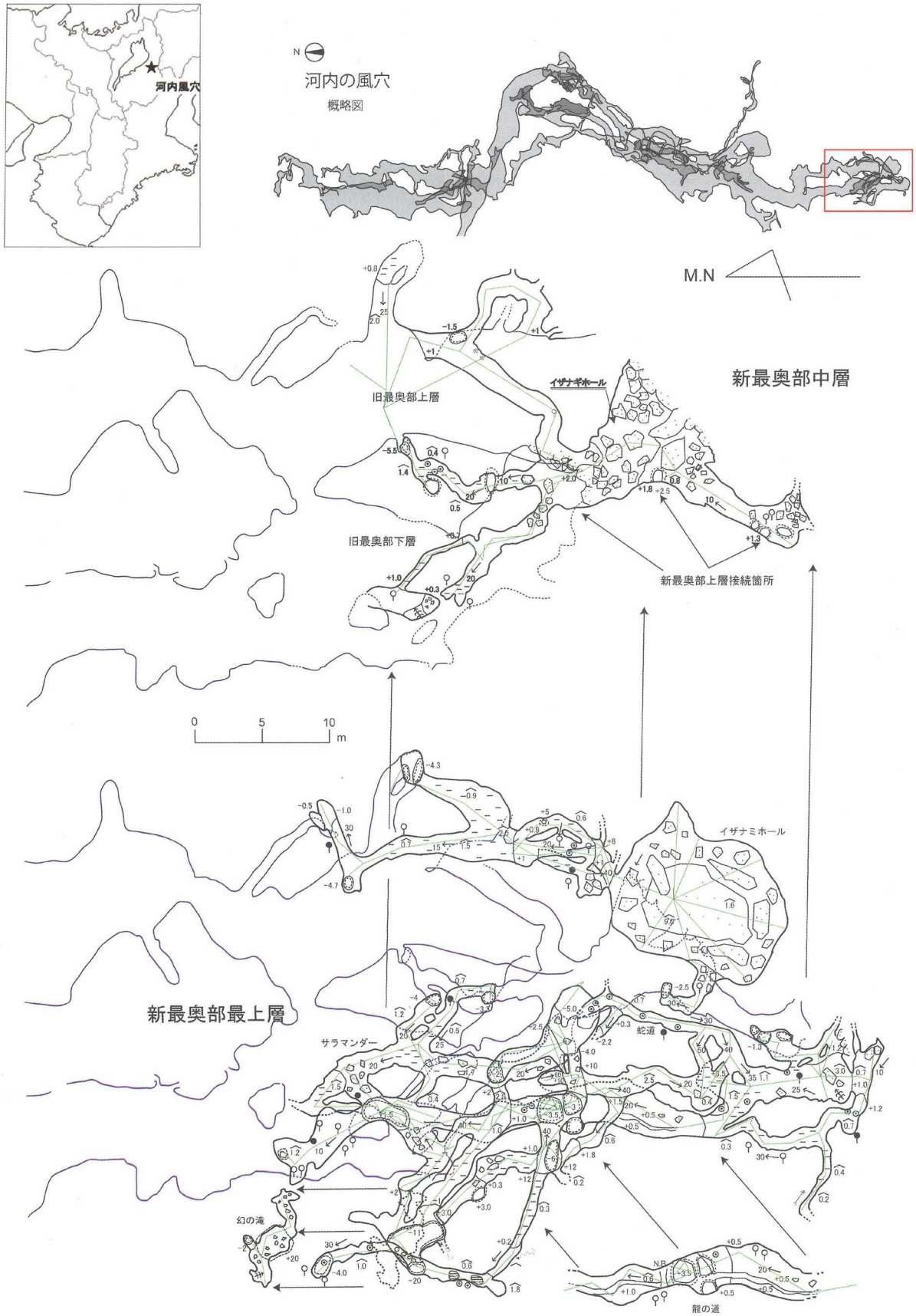
また、河内の風穴一帯には好石灰岩性植物であるヒメフウロ、クモノスシダのほか、ニホンリスやミソサザイなどの動物も確認されている。

[写真 2-30] 河内の風穴

[写真 2-31] 河内の風穴 「鐘の鳴る池」

[写真 2-32] 河内の風穴　コウモリ

[写真 2-33] 河内の風穴　調査



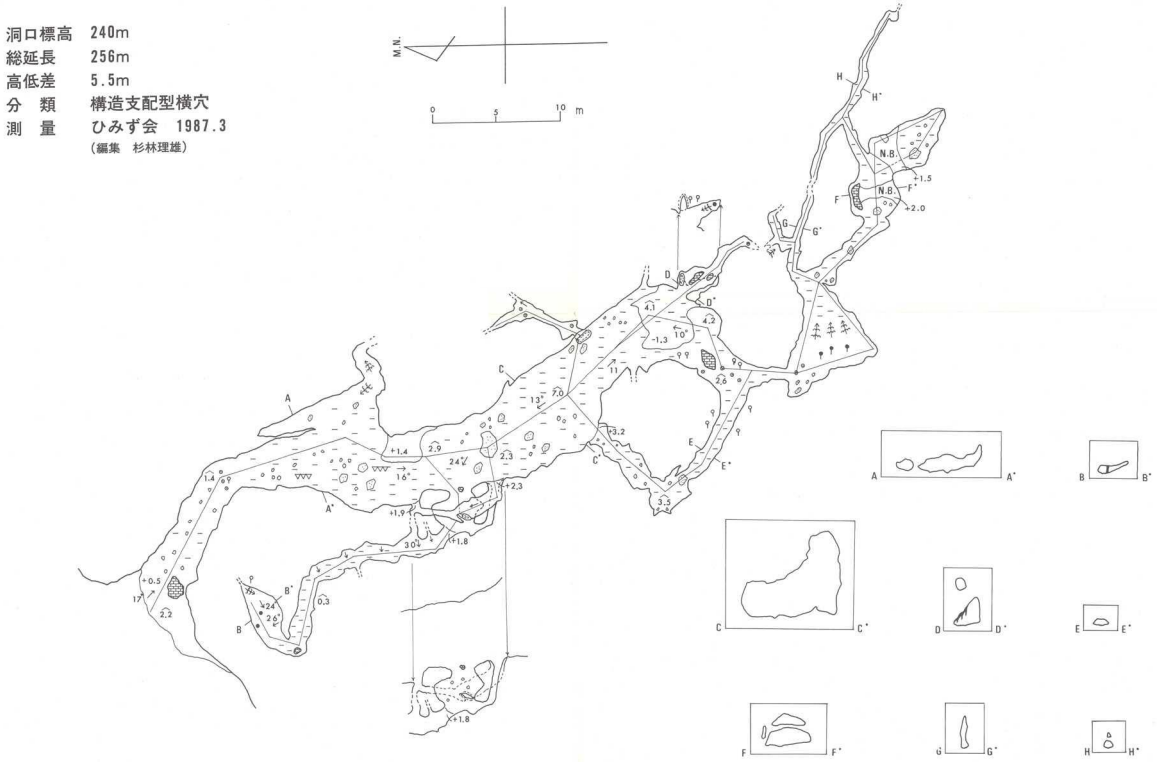
[図 2-14] 河内の風穴平面実測図
（『東京スペレオクラブ 10 周年記念誌』より）

（2）佐目の風穴

佐目地区にある佐目の風穴は犬上川上流左岸の断崖に開いた洞窟であり、別名「佐目のこうもり穴」とも呼ばれる洞窟である。総延長は 256 mあり、洞窟内部は入口に接しているやや大きな洞とこれに続くやや小さな洞のほか、さらに内奥部にいくつかの小規模な鍾乳洞が連続していると推定されるが、石筍（せきじゅん）の林立などにより先へ進むことが困難である。

昭和４年（1929）に小牧実繁らにより発掘が行われ、入口に接している洞の中から縄文時代末期の土器片や貝魚類や哺乳類の遺骸が出土しており、縄文時代に洞窟内で生活していたと考えられる。

佐目の風穴ではコキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリなど多様なコウモリやホラアナゴマオカチグサガイの貝類とコバノチョウセンエノキ、ミスミソウ、ヤマシャクヤク、キンラン、セイタカスズムシソウなどの植物が生息しており、また保護対象とされている。



［図 2-15］佐目の風穴平面図
（『東京スペレオクラブ 10 周年記念誌』付録図版 3 より）

［写真 2-34］佐目の風穴

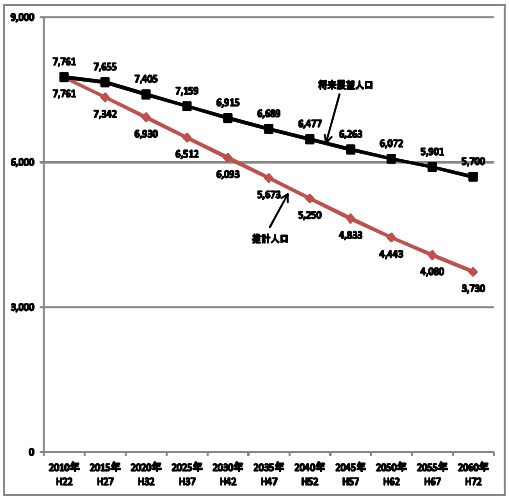
［写真 2-35］佐目の風穴　地学ツアー

第２節　社会環境

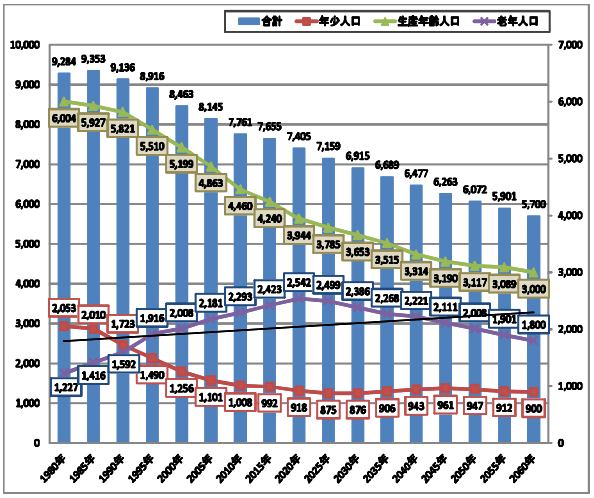
第１項　人口と集落の様子

(1) 人口の推移

新制多賀町が発足した昭和 30 年（1955）に 10,489 人であった人口は、平成 28 年 4 月 30 日現在 7,630 人に減少し、高齢化率は 33.5％となっている。「第 5 次多賀町総合計画（後期基本計画）」の中で、住民基本台帳の人口の数値目標を謳っているが、2020 年に 8,000 人、2040 年に約 7,000 人、2060 年に約 5,700 人を想定しており、国立社会保障・人口問題研究所がとりまとめた推計人口と比較すると、2000 人の増加が見込まれている。転入促進など持続可能な地域の実現が課題である。また、高齢化率は 2020 年に 36.4％、2040 年に 41.2％、2060 年に 42.5％まで上昇 すると予想されており、高齢化率は高いと考えられる。



［図 2-16］将来展望人口と推計人口の比較
（多賀町「第 5 次多賀町総合計画（後期基本計画）」
平成 28 年（2016）3 月）



［図 2-17］総人口･年齢区分別人口の推移（将来展望）
（多賀町「第 5 次多賀町総合計画（後期基本計画）」
平成 28 年（2016）3 月）

(2) 土地利用と集落の様子

本町の総面積は 135.77 ㎢で、土地利用状況は、森林面積が 116.1 ㎢で約 85.5％を占め、農地が 5.8 ㎢で 4.3％、宅地が 3.2 ㎢で 2.4％、その他 10.8 ㎢で 8.0％となっている。近年に入ってから、宅地開発などの波が押し寄せることはなく、土地利用区分は大きく変わっていないものの、宅地と農地の比率は近年に入って大きく逆転する傾向がみられている。

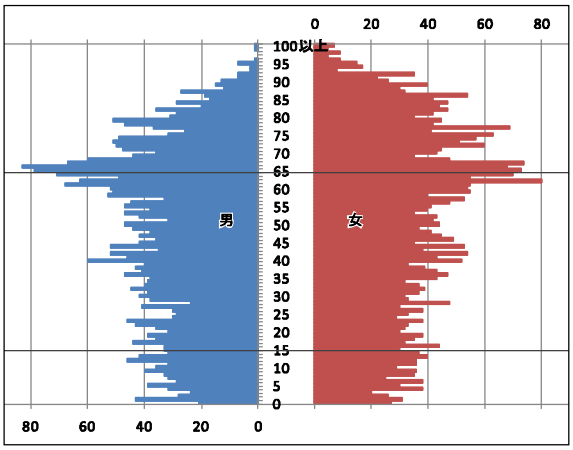
平野部にある多賀・久徳地区に全人口の約 71％が集中している。山間部、特に芹谷・栗栖地区は人口減少が進んでいる。また、年齢別人口構成を見ると、［図 2-18］に示すように多賀町全体では 65 歳前後に大きな膨らみを持つ釣り鐘型であるが、芹谷・栗栖地区では、65 歳以上が大半を占め、女性は特に 75 歳以上が多くなっている。

かつて畑作、林業、炭焼き等で生計を立てていた集落では時代と共に、産業構造の変化や町内外での宅地造成による山村からの移転受け入れが進み、集落からの移住が増加した。残った地域住民も高齢となり生計を立て、住み続けることが難しくなってきている。また除雪作業の費用も莫大であり、山間部の集落維持に関しては、多くの課題がある。

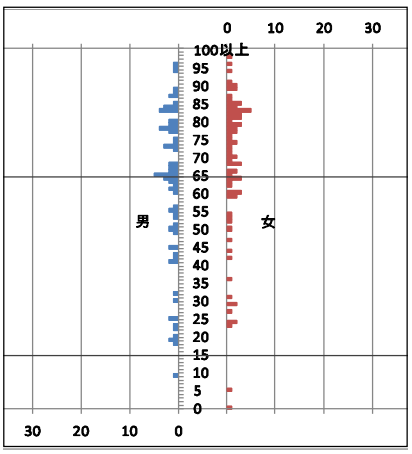
現在は町内で 10 の集落（五僧（ごそう）、保月（ほうづき）、杉、落合、今畑、入谷（にゅうだに）、甲頭倉、向之倉（むかいのくら）、後谷、屏風）が通年又は冬季無人状態となり、桃原（もばら）地区で住民が１～３人という状況にある。一方で、地区によって異なるものの、月に一度、地区行事で地域住民が集まったり、空き家の管理で定期的に訪れる所有者もいる。古道や集落同士の関わり、彦根市の男鬼集落との関係など、聞き取り調査が行われており、集落での総合的な生活文化を明らかにすることは重要である。

特に山間部の茅葺民家は、建築年代が不明のものが多いが、18 世紀末から 19 世紀頃に遡るものもある。また、石積みや利水のための水路、集落地の田畑は、限られた日照や利水を工夫し

て造成されており、山間部の集落空間構成は、地域性に加えて近年失われつつある近世までの生活文化が残されている景観である。これらの山間部の集落景観の多くは過疎化による荒廃が懸念され、豊かな自然環境・歴史文化は危機的状況である。



（全町 2015/4）



（芹谷・栗栖地区 2015/4）

［図 2-18］人口ピラミッド（多賀町『多賀町人口ビジョン』H28 年 2 月）

［写真 2-36］落合地区

［写真 2-37］後谷地区

［写真 2-38］保月地区

［写真 2-39］桃原地区

地区名	該当行政区	人口(人)	都市計画区域
多賀・久徳地区	多賀、尼子、四手、大岡、八重練、一円、木曽、久徳、月之木、中川原、土田、敏満寺、猿木、グリーンヒル多賀、木曽団地	5,481	○
芹谷・栗栖地区	桃原、下村、中村、宮前、山女原、落合、入谷、甲頭倉、屏風、上水谷、下水谷、栗栖	154	×
南谷・北谷地区	川相、藤瀬、一ノ瀬、佛ケ後、樋田、萱原、大杉、小原、霜ケ原、佐目、南後谷、大君ケ畑	1,515	×
富之尾・楢崎地区	富之尾、梨ノ木、楢崎	506	○（楢崎を除く）

［表 2-2］地区別人口（多賀町『多賀町人口ビジョン』H28 年 2 月）

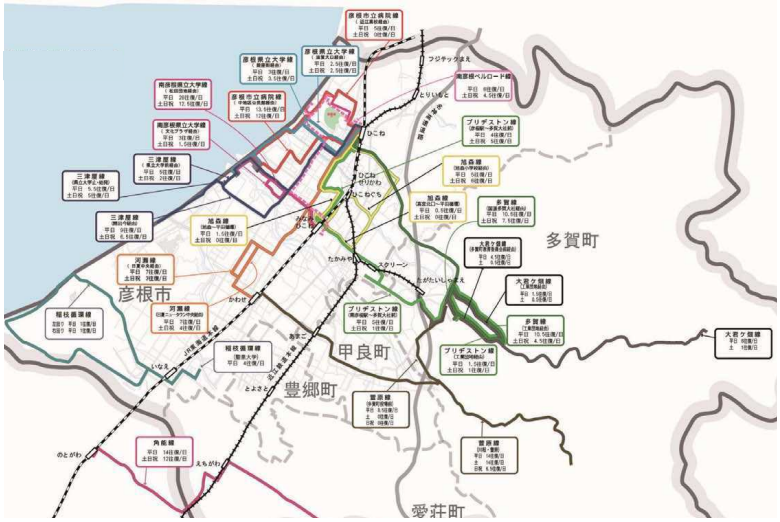
第２項　交通

名神高速道路が町の西部を南北に縦断している。多賀サービスエリアの利用者数は上下合わせて平日約 14,000 人、休日約 38,000 人である。平成 25 年（2013)、名神高速道路の彦根と八日市のインター間に湖東三山スマートインターチェンジが開設され、さらに、彦根インターと湖東三山スマートインターチェンジ間の多賀サービスエリア内にスマートインターチェンジ建設計画がある。また、中心部を国道 306 号が東西に、西部を国道 307 号が南北に通過している。この他、公共交通機関については、近江鉄道が高宮駅と多賀大社前駅との間を平日一日 28 往復運行している（平成 29 年 3 月改正)。

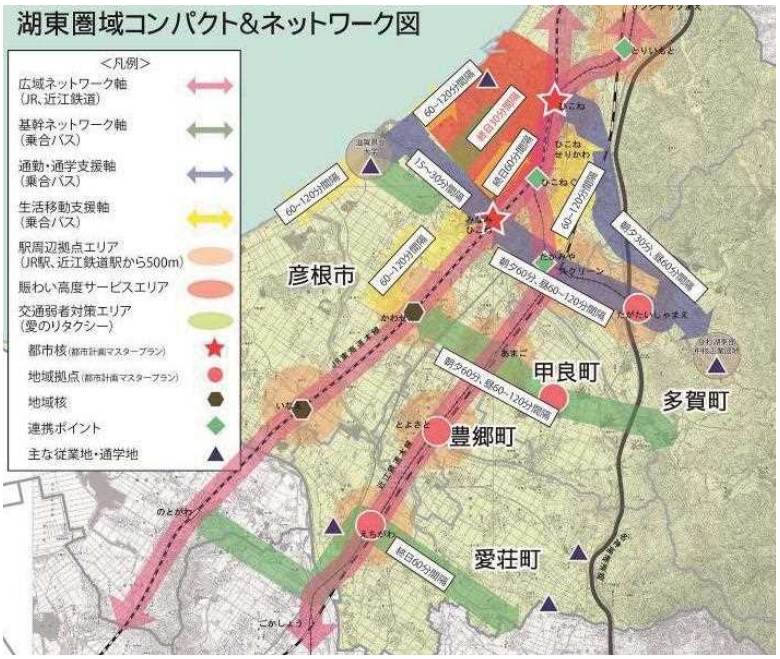
路線バスは、彦根駅・南彦根駅・河瀬駅と集落を結び、現在多賀線、大君ヶ畑線、萱原線、ブリヂストン線の四つの路線が設定されている。

また、主に高齢者の移動支援を目的として、総合病院や大型スーパーと町内全ての集落を結ぶ予約型乗合タクシー「愛のりタクシーたが」を運行している。

平成 21 年 (2009) には「湖東圏域定住自立圏形成協定 」(滋賀県彦根市・愛荘町・豊郷町・甲良町・多賀町）が締結され、近隣市町との公共交通ネットワークの構築に取り組んでいる。同時に湖東全域における文化・経済発展と歴史文化・自然環境の保全とまちづくりへの活用が理念として掲げられているほか、平成 28 年度の「湖東圏域地域公共交通網形成計画」では、鉄道・バス停人口カバー率などが詳細に調査され、圏域全体では 60% 未満になっている状況も指摘されている。また、「湖東圏域地域公共交通網形成計画」では、市街地の拡散、人口減少に伴う公共交通利用者の減少による、公共交通事業者の経営悪化などの現状課題を改善するための提言として、コンパクトシティ＋ネットワークを計画している。公共交通沿線に居住を誘導し、持続安定的な公共交通事業の確立と都市の持続可能性確保が課題である。



［図 2-19］湖東圏域バス路線図（2015 年 4 月 1 日現在）
（「湖東圏域地域公共交通網形成計画」湖東圏域公共交通活性化協議会 2017 年 3 月）

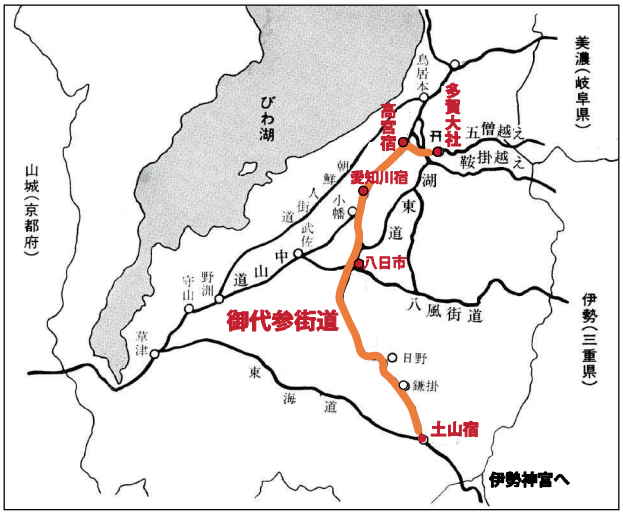


［図 2-20］湖東圏域コンパクトネットワーク図
（「湖東圏域地域公共交通網形成計画」湖東圏域公共交通活性化協議会 2017 年 3 月）

また、古くより多賀大社参詣の街道が広く展開していたが、それらと現代的な交通網のリンクや景観形成は今後の課題としてあげられる。広域の連携計画はもとより、文化区分の理解を進めながら、歴史文化としての認識を重ね合わせることが重要である。

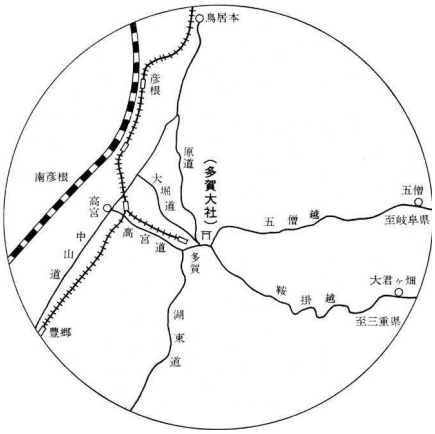
多賀参りの道筋はいくつかあるが、主なものをここにあげる。

- 御代参街道（ごだいさんかいどう）　- 京都から伊勢へ参拝し、その後、旧土山宿から八日市を経て、中山道を北進し、高宮宿から多賀大社に至る街道で、春日局が通った記録もある。東海道と中山道を結ぶ近道で、伊勢参り・多賀参りに利用された。
- 高宮道　- 中山道高宮宿から多賀に至る、多賀大社への表参道である。一の鳥居がその起点となっている。多賀大社までの道筋約一丁（109 m）ごとに石灯籠がある。
- 大堀道（多賀彦根大堀往還道）- 中山道彦根市大堀から、土田地区を経て、多賀大社に至る道。
- 原道　- 彦根市原町から正法寺 - 野田山 - 中川原地区を経て、多賀大社に至る道。中山道からの分岐点には起点となる常夜灯があり、「是より多賀ちかみち」という道標が立っている。現在も 20 近くの道標が残る。
- 湖東道　- 八日市周辺から多賀に通じる道。御河辺橋 - 湖東町 - 秦荘・甲良町 - 敏満寺地区を経て、多賀大社に至る道で、湖東地方の人が多く利用した。
- 鞍掛越え　- 古くから近江と伊勢を結ぶ峠越えの険しい道。現在は車道となっている。
- 五僧越え　- 近江と美濃を結ぶ古い街道。八重練（やえねり）地区から杉坂峠を越え、杉・保月地区を経て五僧地区に通じ岐阜県に至る道。主要な要所であった。



［図 2-21］御代参街道の道筋
（『多賀信仰』多賀大社社務所　昭和 61 年の図 に加筆）

［写真 2-40］原道起点の常夜灯



［図 2-22］多賀参りの主な道筋
（『多賀信仰』多賀大社社務所　昭和 61 年より）

［写真 2-41］原道の二丁石

第３項　産業

(1) 農業

農業は古くからの主要産業で、地勢や気候の関係から、水田は敏満寺・多賀・土田・富之尾・久徳地区など平野部の集落に比較的多く、すべて米作地となっている。畑作の中心地は芹谷・大滝・脇ヶ畑の地域である。

多賀地区では、昭和 20 年（1945）頃、水田化のため、畑作は減少し、自家用菜園程度となった。芹谷地域では、明治から昭和中期まで、ゴボウが特産品であったが、次第に減少した。桃原付近では、昭和 30 年（1955）から 40 年（1965）にかけて一時、葉タバコを栽培し、乾燥倉庫も建てられていた。また、桑畑も目立ち、明治の末から大正・昭和時代にかけて、農家の副業として養蚕業を支えていた。大滝地域でも、明治から大正時代に菜種、養蚕用桑、茶の栽培が盛んであった。敏満寺・土田地区では、桑の栽培が盛んであったが、昭和 17 年（1942）頃になると、食料増産の国策に圧倒され、桑畑をつぶしたため、養蚕業は衰退し、終戦後は食糧難のため、カンショ・バレイショを主として栽培していた。大君ヶ畑地区では、土地柄、種蚕の飼育もされて、養蚕業が平地にくらべると遅くまで残り、桑畑がその名残をとどめていた。杉・保月地区では、昭和中期まで早生（わせ）大根・ゴボウ・ニンジン・小豆が特産品であった。

近年では麦・大豆・そばの本作に向けた取り組みや、パイプハウスによる施設野菜の生産も取り入れている。特にニンジン・ブロッコリー・そばは特産物として栽培の促進を図っている。中でも「多賀そば」は関西でも有数の作付面積を誇る。

「多賀にんじん」、「桃原（もばら）ごぼう」など古くからの特産物の栽培に、地域おこし協力隊（地域外からの移住者による地域協力活動）も参加し、耕作放棄地の再生活動を行っている。「桃原ごぼう」はじめ、山間部のごぼうは非常に評価が高く、カルスト台地の石灰岩から溶け出した炭酸カルシウムが含まれているので、土の栄養を吸ったごぼうは栄養価も高い。かつては高級食材として京都の市場や高級料亭に出荷されていたが、約 30 年ほど前から作り手がなく、幻の食材となっていた。現在は有志により、復活に向けた活動を開始し、親子参加の栽培体験イベント開催等に取り組んでいる。人々の営みや地域の農文化の主役を担う存在である。

［写真 2-42］桃原ごぼう

［写真 2-43］桃原ごぼうの種まき

(2) 林業

林業は旧大滝村等の山間部が中心をなしている。森林面積が町域の約 85.5％を占めており、その 60％が戦後造林されたスギ・ヒノキの人工林である。これらの多くが現在木材として利用可能な段階に達してきている。外国材により厳しい木材市場の中で、いかに地域材を率先して使っていくかが問われている。そこで本町では木質バイオマス利用促進や、公共建築物や住宅における木材の利用を促進している。平成 31 年度開館予定の新しい中央公民館の建設事業においても地域材（多賀町産木材）を採用し建設中である。

かつては、製材業に加え、製炭・薪・松たけ狩りも盛んであった。樹木の育成、製材から流通まで歴史的に捉えなおすことによる魅力付けはもとより、体験型学習の場等にも展開が可能である。また、民家修理等における地域材の建材利用への補助等にも可能性がある。

(3) 工業

石灰岩の豊富な土地で、古くは 12 世紀から石灰の産地であった。「本山石灰」と呼ばれ、公家の御用達品となっていた。また江戸時代より、四手地区の産物として「石」があり、石切場は大岡・八重練地区にもあった。大正の初め頃になると、富之尾地区近くの炭田で亜炭が掘られ、昭和 36 年（1961）まで稼働していた。犬上炭鉱のトロッコレール跡や萱原のマンガン鉱山跡など近代化遺産も点在している。昭和になると大企業が採掘をはじめ、セメント工業も発展し、住友大阪セメントの多賀鉱山は現在も稼働している。戦後しばらくの間、芹谷の甲頭倉地区ではドロマイトの採掘も行われていた。

また、家内工業も多く、造り酒屋や醤油屋、麹屋も各地にみられた。小原（こはら）地区の鍛冶屋も有名であった。現在続いているものは少ないが、本町唯一の地酒である清酒多賀の工場や三和醤油、久保醤油などがある。

多賀町は関西・中部・北陸経済圏のちょうど中間に位置しており、交通の要衝であることから、生産の拠点として有利な立地である。昭和 45 年（1970）には企業誘致のための工業団地造成がはじまった。主に 3 つの工業団地があり、最大のものは、平成 11 年（1999）に完成したびわこ東部中核工業団地である。平成 29 年（2017）現在 10 社が操業している（他に未操業 1 社）。その他、多賀工業団地にはキリンビール株式会社の工場が立地し、中川原工業団地には物流倉庫などが立地している。

[写真 2-44] びわ湖東部中核工業団地

第 4 項　観光

(1) 観光客数

町内における観光客数は、毎年 160 万人前後で横ばいである。観光客数を滋賀県全体から見ると、平均して約 4％弱であるが、多賀大社は毎年約 160 万人が訪れ、県内で 1・2 位を競う観光地である。[表 2-3 参照]。

湖東地域内においては、彦根市を除く他市を大きく引き離し、観光客数が多い。町内における観光客数については、1 月が特に多く、年間客数の半数近くが訪れている［表 2-4 参照]。これは多賀大社への初詣の数と考えられる。目的別観光客数を見ても、全体の約 95％が歴史に関心を持って訪れており、多賀大社の存在が観光に絶大な影響を与えていることが分かる［図 2-23 参照]。多賀大社の古例大祭などは歴史も古く、江戸期には京都の賀茂祭と並び称されていたものの、認知度は低く、さらにその魅力発信に努める必要がある。

(2) 宿泊

現在、町内の宿泊施設は旅館とホテル、キャンプ場などと民泊（宿泊用に提供された個人宅の一部）がある。

（単位：人）

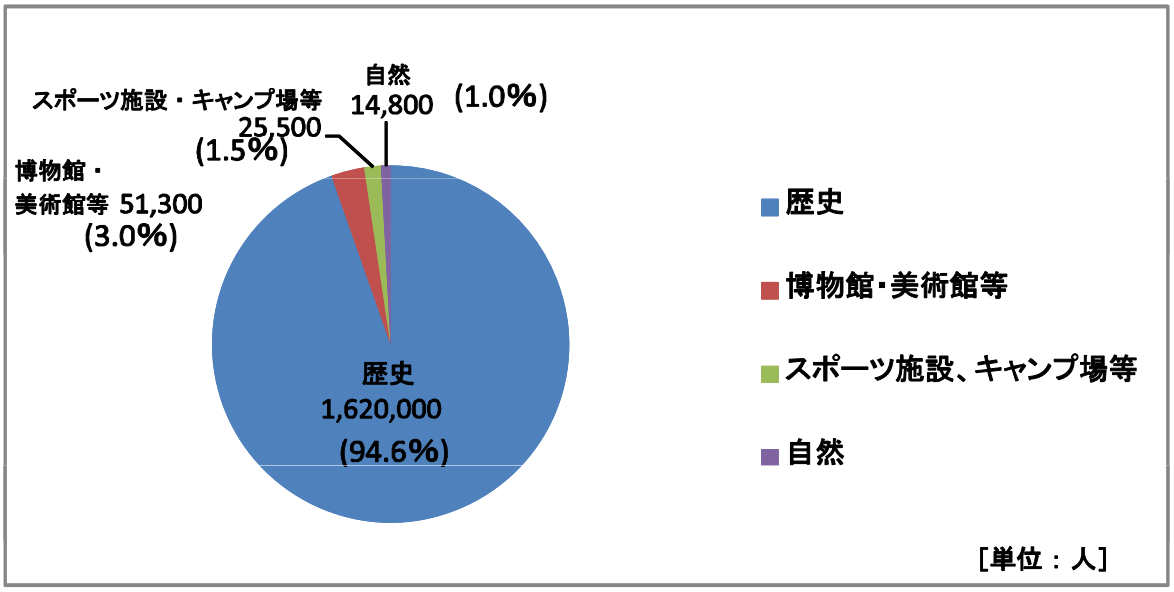
市町	観光地名	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年
多賀町	多賀大社	2 位 1,657,800	2 位 1,599,900	2 位 1,602,400	1 位 1,643,000	2 位 1,620,000
彦根市	彦根城	4 位 730,500	－	4 位 719,500	5 位 743,000	－
長浜市	黒壁ガラス館	1 位 1,799,900	1 位 2,654,600	1 位 1,730,800	2 位 1,636,900	1 位 1,830,000
長浜市	江・浅井三姉妹博覧会	－	3 位 1,186,900	－	－	－
長浜市	豊公園	－	4 位 1,025,300	－	－	4 位 830,800
長浜市	長濱オルゴール館	－	5 位 841,800	－	－	－
高島市	道の駅　藤樹の里 あどがわ	3 位 793,000	－	3 位 833,400	3 位 890,000	3 位 886,700
野洲市・湖南市・竜王市	滋賀県希望が丘　文化公園	5 位 680,200	－	－	4 位 743,400	5 位 765,200
近江八幡市	日牟禮八幡宮	－	－	5 位 659,700	－	－

［表 2-3］年次別滋賀県内における観光客数上位5
（滋賀県ホームページ　滋賀県観光入込客数統計調査書（2016-06-15 参照）
http://www.pref.shiga.lg.jp/f/kanko/irikomichosa-13.html　データを基に作成）

（単位：人）

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	合計
全体数	768,200	120,500	106,700	95,000	93,700	87,500	63,200	88,700	73,500	68,200	93,700	52,700	1,711,600
宿泊者数	0	0	200	100	500	500	1,000	1,500	1,000	300	400	100	5,600

［表 2-4］H26 年多賀町月別観光客入込数
（滋賀県ホームページ　滋賀県観光入込客数統計調査書（2016-06-15 参照）
http://www.pref.shiga.lg.jp/f/kanko/irikomichosa-13.html　データを基に作成）



［図 2-23］多賀町平成 26 年度目的別観光客入込数
（滋賀県ホームページ　滋賀県観光入込客数統計調査書（2016-6-15 参照）
http://www.pref.shiga.lg.jp/f/kanko/irikomichosa-13.html　データを基に作成）

旅館は、「かぎ楼」の１軒である。江戸期創業の老舗料理旅館で、登録有形文化財に登録されており、門前町の景観に欠かすことのできない建造物である。かぎ楼には、参拝客でにぎわう様子が描かれた模写の額絵が残されており、当時の門前町の繁栄がうかがえる［写真 2-47 参照］。他には、多賀サービスエリア下り線のハイウェイホテルと高取山ふれあい公園内の宿泊施設（バンガロー・山の家・自然体験宿泊施設）がある。

平成 26 年（2014）町内宿泊客数は、観光客数 1,711,600 人に対して 5,600 人であり、1％にも満たない人数である［表 2-4 参照］。町内には近年体験型宿泊として注目される、農家民宿として登録している民泊が 20 軒ほどあり、修学旅行と研修旅行限定で農家ホームステイとして受け入れ、グリーンツーリズム（農山村などに長く滞在し、農林業体験やその地域の自然や文化に触れ、地域の人々との交流を楽しむ旅）の場を提供している。田植えや炭焼きなどを学生が体験しており、今後は一般の受け入れも期待される。

［写真 2-45］かぎ楼

［写真 2-46］絵馬通りの糸切餅屋（莚寿堂）

［写真 2-47］かぎ楼の額絵（明治 20 年　上田道三写し）
（御定宿料理店 鍵屋利兵衛店　かぎ楼所蔵）

（3）特産品

名物としては糸切餅、千代結び、多賀そば、鍋焼うどん、地酒「多賀」、あられ、多賀杓子などがあり、多賀大社表参道絵馬通りに販売店が並んでいる。

糸切餅（寿命糸切餅）は、刃物を用いず三味線糸で餅を切ることからこの名がつけられている。

餅の表面に配された青２本、赤１本の筋は、文永・弘安の役の際、元軍の退散を祈願したお礼にと敵船の一部が多賀大社に奉納されたが、この元軍の船印を模したものといわれている。

また、農産物でも米（秋の詩、みずかがみ等）、大君ケ畑地区のお茶、多賀にんじん、ごぼうが知られている。民家には、土間に食材保管用としての穴を設けたり、ごんぼ蔵と呼ばれる蔵を建てることがあったという。

［写真 2-48］糸切餅

［写真 2-49］千代結び

（4）その他

多賀観光協会では観光ボランティアガイドを養成しているほか、ガイド引率による「絵馬通り散策コース」と胡宮神社と多賀大社をめぐる「多賀大社参拝を巡るコース」がある。この他、町としては多賀町レンタサイクル条例（平成 22 年（2010））を定め、レンタサイクル事業も実施している。

また、湖東地域には数多くの文化財が存在しているが、彦根城をはじめ、湖東三山の天台宗寺院（西明寺（甲良町）、金剛輪寺（愛荘町）、百済寺（東近江市））、中山道の宿場町、近江商人の町並み、鈴鹿山脈の山並みや水郷めぐり等、歴史文化と自然を楽しむことができる貴重な地域であり、近隣地域との連携も視野に入れると、さまざまな可能性がある。一方で多賀町はルート中継地点の一つでもあるといえよう。多賀大社と敏満寺は、彦根城と湖東三山と永源寺（東近江市）までの湖東地域を広域連携の観光ルートとしても成立しており、町内での農林業体験やものづくり体験等とも結びつけ、多様な観光資源とまちづくりへの可能性を追求する必要があるだろう。

さらに、山間部の集落についても、高原気候のような環境を有しており、夏季の避暑地等の可能性も秘めている。いわゆる、観光バスやマイカー、公共交通機関での旅行・ツアーの形式にこだわらず、広い意味でのツーリズムの可能性を無限大に有しており、近畿圏では類例を見ない、環境と景観を保持する特徴を持っている。

近年においては、文化財の活用が地域振興や観光振興にも資するという認識が高まってきている。地域の文化財を発信・活用することを通じて、地域住民や関係団体等がその価値を正しく理解するとともに、当事者としての意識を醸成することが課題である。また、持続可能な活動とするために、継続的な基盤・体制の整備が重要である。来訪者数増加と共に地域産業の消費拡大を目指す場合、宿泊施設などの受け皿や人材整備も合わせて検討していく必要がある。

また、文化財を生きた遺産として保存継承していく上で、担い手となる人材不足が問題視されており、地域住民だけでなく、町外からの新たな担い手も取り込む必要がある。多賀町の歴史文化・自然環境への関心を高め、多賀ファンを増やすことで、保存活動への広域的な受け入れを目指さなければならない。

観光情報は、継続して来訪者に伝えられるべきであり、それらは、参加型 SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）等による情報共有も視野に入れ、かつ、まちづくりの担い手として参加できる可能性も視野に入れながら、検討を進めることが必要である。

第３節　多賀町の歴史文化

第１項　町名呼称の由来

町域は古代には「タカ」と呼ばれていたと考えられている。平安時代には「田何」、「田鹿」、「田可」、「多可」等の名が認められる。

多賀大社および敏満寺、胡宮神社を中心として形成された集落や荘園、多賀大社においては門前町が地域を形成している。

古代の「タカ」は神の坐所としての「高」を意味していたと推測されており、後世の「多賀」は鎌倉時代に、「高の宮（たかのみや）」が「多賀宮（たがのみや）」になり、異称として生じたものと考えられる。

第２項　歴史的沿革

(1) 有史以前

最も古い時代を示す岩石は約 2.5 億年前から２億年前に赤道に近い海洋で形成された玄武岩質の溶岩や石灰岩・チャート・泥岩で、多賀町の大地の土台となっている。

その後、約 7,000 万年前には多賀町はユーラシア大陸東部にあって大規模な火山活動が起こっている地域となった。そのユーラシア大陸から分離し、現在の日本列島が形成された後、約 180 万年前には多賀町付近に琵琶湖が侵入し、周辺にアケボノゾウやシカなど大型のほ乳類が棲む豊かな自然が広がった。

[写真 2-50] アケボノゾウの全身骨格

約３万年前には多賀町に沢山のナウマンゾウが棲んでいた。この頃は約 30 万年前から日本列島に棲んでいたナウマンゾウが姿を消しつつあった時代である。多賀町の祖先の人々が、縄文時代の前からナウマンゾウと共に生活していたのか興味深い。

[写真 2-51] 芹川で発見された
ナウマンゾウの臼歯

(2) 縄文時代～弥生時代

佐目の洞窟遺跡からは、縄文時代後期の土器片や動物の遺骸が出土している。大岡遺跡からは、縄文・弥生時代の遺物が出土しており、縄文から中世に至る複合遺跡が推定されている。他に土田遺跡でも縄文時代晩期の遺構が検出されていて、県内でも最大級の土器棺墓群が検出されている。

(3) 古墳時代

芹川両岸の扇状地にある木曽遺跡と土田遺跡では、古墳時代初頭の竪穴住居跡が確認されており、この頃より現在に至るまで集落が営まれたようである。古墳時代後期には、木曽遺跡で渡来系氏族の建築技法とされる「大壁造」建物跡が検出され

[写真 2-52] 発掘時の楢崎古墳群

ている。

また、犬上川左岸の扇状地には古墳時代後期に群集墳が盛行し、これらの中にも渡来系氏族の存在を想定させる構造の石室や副葬品が出土しており、扇状地の開発に渡来系氏族が大きく関わっていたと考えられる。

（4）奈良時代

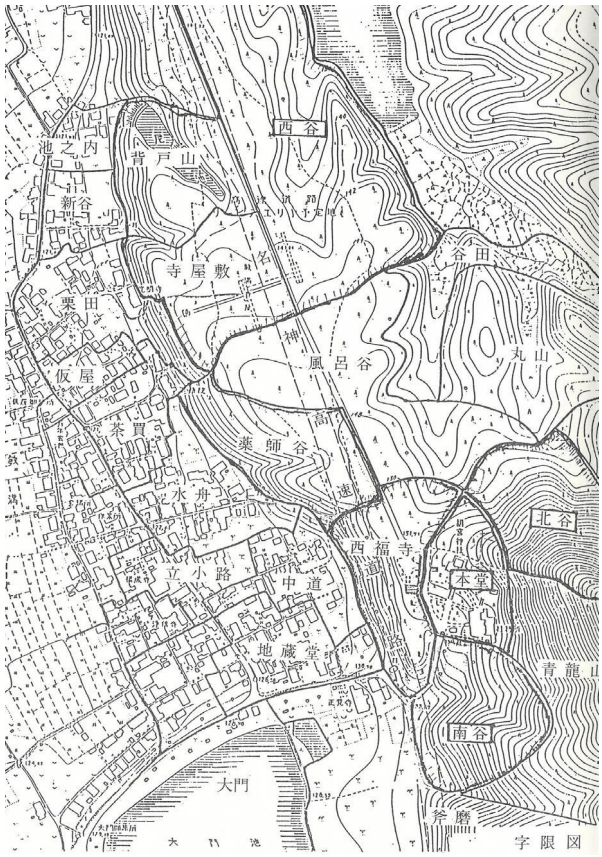
奈良時代になると、史料から当地域の様子を読み解くことができる。和銅５年（712）に編纂された『古事記』の写本の中で現存最古の真福寺本（1371-1372 成立）には、「伊邪那岐大神は淡海の多賀に坐すなり」と記述される。平安時代に書かれた『新抄格勅符抄』には、天平神護２年（766）に「田鹿神」に封戸が施入されたとある。

当地域が早くから開発されたことを示す貴重な史料として、天平勝宝３年（751）作成の「近江国水沼（みぬま）村墾田地図」があり、正倉院に保管されている。近江国司が、水沼村（現在の敏満寺地区付近）を開墾したことを報告したこの絵図には「下田鹿道田」「中田鹿道田」という水田名が見られる。

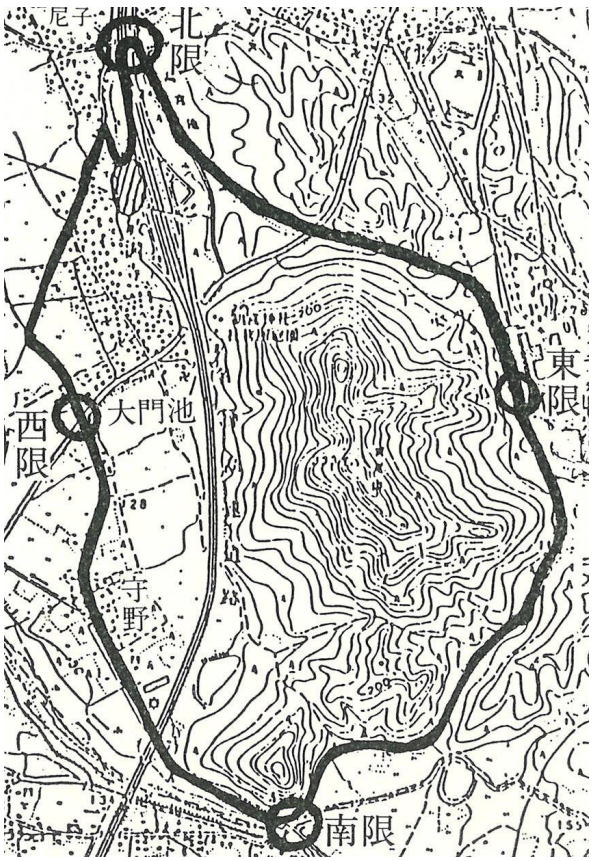
（5）平安時代

平安時代になると、荘園に関する史料・遺跡が散見される。『安祥寺伽藍縁起資財帳』の貞観９年（867）、「近江国犬上郡田鹿郷田鹿村赤岡庄」空閑地の記載があり、その他、平等院領であった大与度庄や興善院領の石灰庄などがあった。奈良時代に水沼庄があったと推定される敏満寺西遺跡では、平安時代の荘官跡とされる大型建物などが確認されている。

延長５年（927）の『延喜式』神名帳には「多何神社二座」と境内社の「日向神社」があり、承平４年（934）頃の『和名類聚抄』には「田可」、「火田」の郷名が見える。



［図 2-24］敏満寺の谷々（『多賀町史上巻』より引用）



［図 2-25］敏満寺の四至（『多賀町史上巻』より引用）

天治２年（1125）の「長吏坊政所下文案」に敏満寺の四至が記載され、これが「敏満寺」の名が初めて記された史料である。

平野部東の丘陵上にある梨ノ木東遺跡では、平安時代中期の緑釉陶器が木炭郭から出土しており、大谷遺跡では鉄板を伴う墓が多数確認されるなど、丘陵部は身分の高い人たちの墓域であったと考えられる。「白河本百合文書」には承安３年(1173)石灰庄と多賀町土田地区付近が呼ばれ、石灰生産が開始されたこともうかがえる。

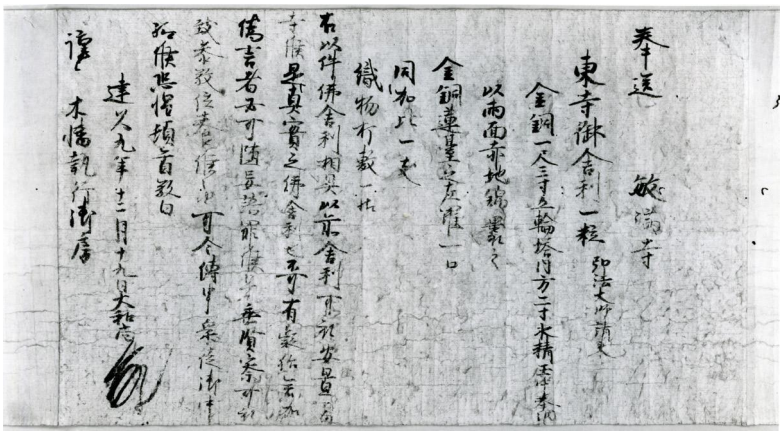
(6) 鎌倉時代

鎌倉時代では、元寇の襲来に際して、時の執権北条時宗が敵国降伏祈願を全国的に命じているが、敏満寺にこの文書が残されている。近江国守護佐々木泰綱に北条時宗と義政が送ったもので、建治元年（1275）９月 14 日の日付がある。また、敏満寺は建久９年（1198）俊乗坊重源（ちょうげん）が仏舎利入りの銅製五輪塔を寄進したことでも知られている。当時重源上人は東大寺再建のために、全国から浄財を募り、敏満寺はいち早くその要請に応じ存分の誠意を示した。銅製五輪塔と寄進状は、その謝意として施入されたものである。さらに、近江猿楽（おうみさるがく）の中で最も古い歴史を持つ「みまじ座」の拠点であったことでも知られる。

胡宮神社は、古くは青龍山山頂の「磐座（いわくら）」の崇拝にその起源があると考えられ、鎌倉時代には、敏満寺の鎮護の神として栄えた。敏満寺は、この頃 48 伽藍 120 坊の規模があったといわれ、鎌倉時代には多賀町の基幹をなす存在であったと考えられる。

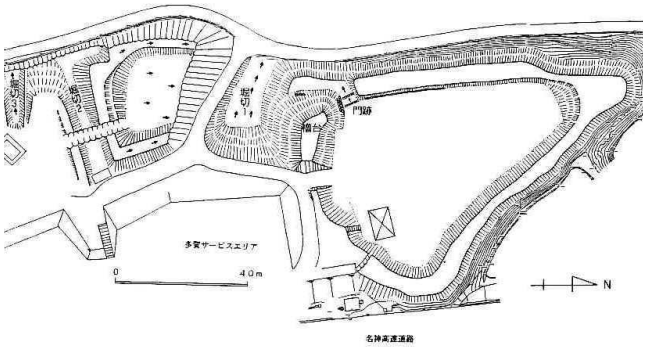
[写真 2-53] 銅製五輪塔（胡宮神社所蔵）

[写真 2-54] 敏満寺石仏谷墓跡



奉送　敏満寺
東寺御舎利一粒
金銅一尺三寸五輪塔内方二寸水精瑠璃
以両面赤地錦裹
金銅蓮華座
同和上一
織物有載一
右以件仏舎利相具以前舎利
偽吉者五可堕長悪罪
建久九年十二月十九日大和尚
木幡記行

[写真 2-55] 銅製五輪塔附指定　紙本墨書寄進状（胡宮神社所蔵）



［図 2-26］敏満寺城跡　遺構図

［写真 2-56］敏満寺城跡

(7) 室町時代

明応３年 (1494) に、近江国の守護佐々木高頼が多賀豊後守高満に命じて、多賀大社に護摩堂と不動坊を建立させた。不動坊はのちに不動院とあらため、「別当（べっとう）」として約 400 年間、神社運営の実権を握っていた。多賀大社には不動院、般若院、成就院、観音院という四つの本願（勧進を行う寺院）があり、それぞれに坊人（ぼうにん）が属していた。坊人は多賀の住人のみではなく、蒲生郡や甲賀郡など修験の盛んな地域の住人が所属しており、この坊人の諸国を廻る活動が、寿命の神として、「お多賀さん」の崇拝を全国的に集めることになった。

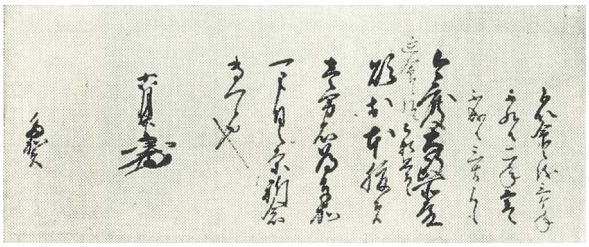
一方、鎌倉時代に勢力を誇った敏満寺であったが、天文 17 年（1548）には、「みまじ座」の菅浦での猿楽上演権を菅浦惣中へ売り渡す史料が残されている。

火災による堂塔の焼失や永禄５年（1562）の浅井長政による焼き討ちの後、再建するも、元亀３年（1572）織田信長により焼き討ちにあったとされ、寺領も取り上げられ、衰退の一途をたどった。敏満寺の城郭化の時期については、定かではないが、15 世紀末から 16 世紀末にかけての遺跡であり、櫓台、土塁、堀、虎口等の遺構が検出されている。

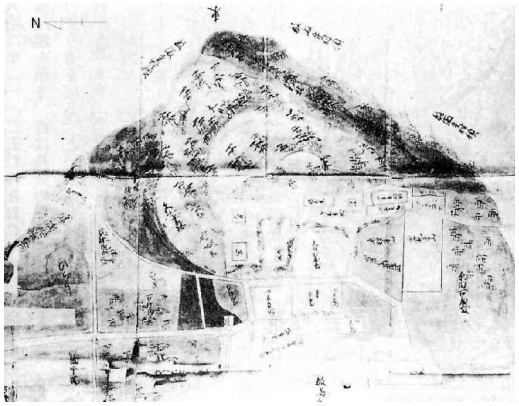
(8) 安土桃山時代

多賀大社は、浅井長政、織田信長、豊臣秀吉など時の権力者から庇護を受けた。天正 16 年（1588）には、秀吉が近畿の諸神社に母大政所の病気平癒の延命を祈願しており、多賀大社に祈願文が残されている。大政所が回復すると約束どおり１万石が寄進され、これにより本地堂、庁屋（神官が神事を行う所）などが建替えられたとされている。

関ヶ原の戦いで敗れた西軍の武将・島津義弘の退き口は、一説に多賀町の五僧峠を越えたとも言われ、多賀から岐阜へと抜ける五僧越えは「島津越え」とも呼ばれている。



［写真 2-57］豊臣秀吉の祈願文（多賀大社所蔵）



［図 2-27］胡宮神社境内絵図

［写真 2-58］多賀大社

［写真 2-59］多賀大社そり橋（太閤橋）

（9）江戸時代

江戸幕府が開かれ、多賀大社は徳川家康より代々庇護を受け、３代将軍家光の時代、不動院５世慈性（じしょう）の訴えにより幕府による大規模な造営が行われた。このとき、胡宮神社本殿、大瀧神社本殿もあわせて造営されている。

江戸期は井伊家の藩政下にあった。藩の法令の高札場が多賀にもあった。石材産出もこの頃は多く、四手・大岡・八重練地区の産物として広く知られている。

犬上川の水に関して、争論があった。犬上川の水は、一之井の堰（甲良町側）で水を止めて甲良町側へ流すように配分されていた。二之井（多賀町側）では、その漏れ水を受けて多賀町側へ流す仕組みになっていた。漏れ水は調整が可能であったが、水不足から一之井の堰で完全に水止めをすることがしばしばあった。こうしたことが原因で激しい争いがあり、古い記録では延宝４年（1676）の「ねずみ搗事件」で、以降たびたび流血の惨事まで招き、昭和の犬上ダム建設まで続いた。

（10）近代

明治時代

明治４年（1871）旧暦７月 14 日に廃藩置県が断行され、各字（村）は彦根県の管轄下となった。同年 11 月、彦根県は第一次府県廃合により、長浜県になり（彦根県（旧・彦根藩）・宮川県（旧・近江宮川藩）・山上県（旧・山上藩）・朝日山県（旧・朝日山藩）が新設合併）、翌年２月には犬上県に改称し、犬上県庁が犬上郡彦根に設置される。さらに明治５年（1872）９月、滋賀県に統一され、県域が確定された。現在の多賀町域は江戸時代以前から中山道の高宮宿を含めた多賀大社参詣道の文化圏の一部となっている。これは彦根市の高宮町が、多賀大社の門前で多賀参りの道筋の通過点であったためである。また、東海道から中山道の「御代参街道（ごだいさんかいどう）」も多賀大社参詣道であり、広域的な多賀大社の影響下にある地域であったが、行政区としては分割されているため、参詣文化圏というものを検討する場合には市町枠を超えて議論が必要である。

明治７年（1874）に多賀学校（多賀町立多賀小学校の前身）が創立され、明治 22 年（1889）４月には町村制が施行され、四手村・多賀村・敏満寺村・土田村・猿木村の区域をもって多賀村が発足した。17 の学校が、離合集散し、明治 25 年（1892）安定した学校になった。

大正時代

大正３年（1914）に近江鉄道多賀線（高宮駅 - 土田駅 - 現多賀大社前駅の前身である多賀駅）が開通し、米原との結びつきが生まれる。のちの大正 14 年（1925）には近江鉄道多賀線の電化が完了している。

大正 12 年（1923）に郡制が廃止され、明治に開始された郡林植栽の事業を継続するため、新しく犬上郡町村営林組合が結成された。これは地域住民に就業の場を提供し、山村復興の一大拠点として重要な役割を担った。

（11）現代

昭和時代

昭和 16 年（1941）に多賀村・芹谷村・久徳村が合併して多賀町が発足（第一次多賀町）。

昭和 30 年（1955）には大滝村･脇ヶ畑村と合併し､改めて多賀町が発足（第二次多賀町）する。これに伴い、中学校は、多賀町立多賀中学校（第一次多賀中）と同芹谷分校・脇ヶ畑分校・佐目分校、多賀町立大滝中学校と同大君ヶ畑分校が開校した。小学校は改称したり、後谷教室と霊仙教室が昭和 38 年（1963）分校へと変わった。

昭和 31 年(1956)には石灰岩の産出とセメント工業を誘致し､彦根方面への供給が開始された。

昭和 39 年（1964）に東海道新幹線、および、名神高速道路が開通し、多賀サービスエリアが供用開始された。しかし高度成長期に差し掛かると炭の需要減少に伴って、五僧地区、向之倉地区も過疎化が進んだ。昭和 51 年（1976）には保月地区および杉地区が冬季無人状態となり、つづいて昭和 54 年（1979）に今畑集落が冬季無人状態となった。外材輸入による国内産木材の打撃等による山里の急激な過疎化現象に加え、道路のつけかえ、拡幅、舗装化及び町内外での宅地造成による山村からの移転受け入れが進み、山村外に住居を移し、山仕事は通う姿に変わった。

昭和 40 年代、若者の町離れを食い止め、農村地域の振興を図るため、企業誘致に意欲を示し、工業団地が企画された。多賀工業団地、中川原工業団地と次々に計画され、キリンビール株式会社が創業開始した。こうした大企業の立地に伴い、都市計画道路として敏満寺－高宮八号線（接続）の一部が開設されたり、町道の改修整備や太田川の改修など関連開発事業が行われた。

平成以後

経済の活況を背後に、平成 3 年（1991）四手地区に、びわ湖東部中核工業団地の造成が着工される。平成 5 年（1993)、この造成工事において、古琵琶湖層の粘土中から大型動物の骨格化石が発見され、調査の結果アケボノゾウのほぼ完全な全身骨格化石と判明した。この骨格標本の展示や化石の紹介を目的とし、あけぼのパーク多賀として、多賀町立図書館、多賀町立博物館が平成 10 年（1998）から開設され、同時に文化財センターも併設された。それ以降も埋蔵文化財関連では平成 7 年（1995）に楢崎古墳群の発掘調査を開始（平成 11 年（1999）終了）し、その結果、61 基の古墳が確認され、平成 11 年（1999）4 月に楢崎古墳公園として町指定文化財の楢崎古墳が復元整備され横穴式石室が公開されている。

平成 10 年（1998）には近江鉄道多賀線の多賀駅が多賀大社前駅に改称される。平成 11 年（1999)、びわ湖東部中核工業団地が竣工し、地域における産業振興の中核的拠点となった。

平成 20 年（2008）には近江鉄道多賀線高宮駅 - 多賀大社前駅間で、スクリーン駅が開業。平成 22 年（2010）名神高速道路多賀サービスエリア下り線にて商業施設「EXPASA」が開業し、平成 25 年（2013）に、多賀サービスエリアと八日市インターチェンジ間で、湖東三山スマートインターチェンジが開設された。

平成 23 年（2011）に多賀第二工業団地の造成が完成し、現在 4 つの工業団地を中心として大手企業の工場が多く立地し､湖東地域内においても､産業の集積状況が比較的高い地域となった。

現在は、人口の減少に伴い、過疎等も問題となるほか、学校等教育施設の統廃合問題など教育環境も大きく変化している。平成 29 年（2017）現在、町立幼稚園が 1 校（多賀幼稚園)、町立小学校が 2 校（多賀小学校・大滝小学校)、町立中学校が 1 校（多賀中学校）となっている。

第４節　多賀町の文化財

第１項　多賀町の文化財の現状

町内の有形・無形文化財は、多賀大社と敏満寺（胡宮神社）を中心とした平野部と、山間部に存在する集落に見られる。山間部の集落では独特の民俗文化が形成されていたが、過疎化により伝統行事が途絶えた集落もある。町内では文化的景観や伝統的建造物群、保存技術に選定されたものはなく、選定に向けた取組みが必要となっている。

遺跡（埋蔵文化財包蔵地）は平野部の大部分に集落跡が見られ、古墳群もいくつか存在する。山間部には城跡が主に分布している。記念物等の自然分野においては、山間部を中心に貴重な動植物が見られ、町北部の石灰岩地帯では化石や独特の地形が見られる。

文化財関係の調査研究や資料の収集保管、普及事業は文化財センターが行い、隣接する博物館では自然分野を中心に活動を行っている。

（1）有形文化財（建造物）

町内の建造物として、県指定が３件、町指定が２件､国の登録有形文化財の建造物が７件ある。

●指定の有形文化財

・多賀大社

多賀大社は天平８年（736）に建立され、天平10年（738）に各諸堂が再建されたといい、以後も度々修理が行われたが、詳細は明らかではない。本殿は徳川家光が再建を命じ、寛永15年（1638）に完成した。しかし以後２度の火災や倒壊があり、昭和の大改修を経て今に至る。本殿をはじめ、拝殿、幣殿、手水舎、神馬舎、表門など11棟が町の有形文化財に指定されている。

[写真 2-60] 多賀大社本殿・拝殿など

奥書院については安永３年（1774）頃と考えられているが、記録は無い。同じ頃の大書院や小書院は失われ、構成や装飾等は、規模や位置が変えられてはいるものの､近世中頃の特徴がみられ、滋賀県の有形文化財に指定されている。

[写真 2-61] 多賀大社奥書院

・胡宮神社

胡宮神社は、もとは敏満寺の鎮護の神であったので、敏満寺の境内であったといわれる場所に建っている。永禄、元亀の兵火により敏満寺は衰退､反して胡宮神社が隆盛した｡寛永15年(1638)徳川家光の命により、多賀大社、大瀧神社とともに社殿が修復された。本殿は三間社流造で、滋賀県の有形文化財に指定されている。

社務所は、別当を勤めた福寿院の跡地に位置する。入母屋造・茅葺の母屋が西面して建ち、北西隅には神饌所が別棟で附属する。名勝指定範囲に含まれ､名勝庭園と一体的な景観を形成している。国庫補助を受けて平成27年（2015）から修理されている。

[写真 2-62] 胡宮神社本殿

・大瀧神社

創建は不詳だが、大同２年（807）、坂上田村麻呂の願いで創建されたものと伝えられている。寛永15年(1638)徳川家光の命により、多賀大社、胡宮神社とともに大瀧神社の社殿が修復されている。本殿は一間社流造檜皮葺で、象頭形の木鼻、花鳥を刻した蟇股（かえるまた）や欄間などに江戸初期の様式手法を残していることから、滋賀県の有形文化財に指定されている。

[写真 2-63] 大瀧神社本殿

●登録有形文化財

多賀大社の門前町にある明治期建築のかぎ楼と大正期建築のかめや旅館、江戸末期から明治にかけての旧一圓家住宅の主屋、文庫蔵、米蔵などがある。

・かめや旅館

参道に接して建つ大型の旅館建築である。大正13年（1924）に建設されたと伝わっている。本館は総二階建てで入母屋の破風を有する町家形式の構えであり、奥に広間が平屋で建っている。これは昭和８年（1933）に増築されている。社寺建築専門の人が設計したとされ、施工も宮大工という上質な建築である。

[写真 2-64] かめや旅館

・かぎ楼

かめや旅館の向かいに位置する３層の旅館建築で、式内日向神社参道に位置している。石鳥居が前にあった。近代初期の料亭旅館として貴重で、入母屋妻入りの外観と切妻の複合した形状はかめや旅館と共に重要な景観を形成している。

[写真 2-65] かぎ楼

●未指定の有形文化財

・社寺建築

『滋賀県の近世社寺建築』（昭和61年）の調査報告書では、町内において、神社66、寺院100（棟数）箇所の調査が実施されており、県内でも多数の文化財を有していることがわかる。特に大岡地区の八幡神社は一間社流造の17世紀後半とみられ、極めて古式の技法が用いられているほか、土田地区の東出地蔵尊は一間社流造を地蔵堂に改造したもので、17世紀前期から中期にかけての作とみられるものが残されている。

その他、多賀地区の西徳寺の表門は寛政３年（1791）の寺蔵記録があり、絵様肘木を持った四脚門で、本堂と鐘楼も18世紀後半とされる。ここは多賀大社の別当寺である由緒ある寺である。

[写真 2-66] 西徳寺の表門

・民家建築

『滋賀県の近世民家』（平成 10 年）の調査報告書には、町内では、11 件の第一次調査対象があり、中には 18 世紀から江戸末期頃のものが判明しており、多くの近世民家が残っている。

河内宮前（かわちみやまえ）地区の藤本家は 18 世紀末の推定がなされたもので、地域の一般的な特徴といえる整形四間取の平面形式で、全面葺卸しの屋根であった。山間部農家の民家として典型的なものであり、貴重な民家である。栗の太い大黒柱による積雪対応や当初イロリなどが残されており、地域の特色も伝わっている。水谷地区の山口家は 19 世紀中期と推定される民家で、これも整形四間取の平面形式であり、近代初期の歴史文化として、優れたものである。こうした時代の民家は少なくとも山間部の谷筋および集落にそれぞれ十軒程度から数十軒は存在しており、詳細調査は未実施であるが、さらに古いものも残されていると考えられる。他にも灰小屋（農作業に必要な焼き灰を作る小屋）、ガッタリ（ししおどしの原理を応用した米つき機）のある地域性の高い風景等が存在していたことも確認されている。

・多賀大社の門前町

土産物店や名物の糸切餅屋等の町家が建ち並び門前町を構成しており、その間には各種の商店と邸宅が軒を並べている。一般的には切り妻造りの平入り、厨子二階建て桟瓦葺の家屋であり、中には平格子もそのまま残した町家もある。莚寿堂やＪＡ東びわこ多賀支店（旧多賀荘農協）（昭和１１年（1936）築）、その他多数の近代とみられる和風建築が通り沿いだけでも８０軒前後確認できる。

[写真 2-67] 藤本家住宅（河内宮前地区）

村山たかは井伊直弼とそれを助けた長野主膳に仕えていた女性であり、安政の大獄に暗躍した人物として知られるが、その生まれ育った家（村山たか住居跡）も残されている。また、元旅館のもんぜん亭のように改修され、地域コミュニティーに役立っているもののほかに、妻入りの総二階民家が２軒あり、街道を通じて伝わった他地域の民家形式も見られる。水路には花崗岩の縁石が設置される等、上質な町並み景観が形成されていることがわかる。なお、失われつつある近世の民家等においては、応急処置の必要なものをリスト化して、取り壊しを防ぐことが必要である。

[写真 2-68] 多賀大社門前町の町並み（多賀地区）

・近代建築

『滋賀県の近代和風建築』（平成６年）の調査報告書では、町内で 18 件の調査が実施されており、明治から昭和にかけて建設された和風建築の報告がある。前述の料理旅館の他に、敏満寺地区には北川彦次郎設計として知られる敏満寺公民館があり、同じく多賀地区の宮大工石田某による小菅医院、大杉地区には旧大杉医院などが建築され、近代の繁栄に沿った近代建築も存在している。

[写真 2-69] もんぜん亭（多賀地区）

・石造物

町内には多賀大社に関係する石造物が多く残されている。町指定の多賀大社そり橋は、太閤秀吉より生母・大政所の病気平癒祈願の依頼を受け、その立願に対する１万石奉加により堂舎が整備されたときに再造されたと伝わることから「太閤橋」と呼ばれる。当初は板橋であったが、寛永年間の造営により現在の石橋に造り替えられている。その他、境内の鳥居や燈籠、常夜燈、参詣道にある道標や常夜燈等も多賀信仰を物語る遺産として貴重である。

中山道高宮宿を起点とする多賀大社参詣道の入口には、県指定の「一の鳥居」と呼ばれる高さ１１ｍ、柱間約８ｍの多賀大社鳥居が存在する。これも寛永年間の造営で石鳥居として再造されたものである。

未指定ではあるが、胡宮神社境内の小野道風筆と伝えられる下乗石や観音堂の聖観音立像、胡宮神社への道中にあった粕地蔵（敏満寺地区）等は、江戸時代の地誌類に紹介されており、よく知られていた。その他、胡宮神社の燈籠台座や大日場（敏満寺地区）の大日如来坐像、西琳寺（富之尾地区）の五輪塔、高源寺（楢崎地区）や安養寺（河内宮前地区）の宝篋印塔（ほうきょういんとう）なども貴重である。

・土木遺産

土木遺産としては、用水池が古代から知られている。大門池は敏満寺地区に所在する。

敏満寺の地名は中世を通じて当地に繁栄した寺名に由来し、大門池の名称もこの寺の大門近くに位置したことによるといわれているが、本来は「水沼池（みぬまいけ）」と呼ばれていた。すなわち、天平勝宝３年 (751) の「近江国水沼村懇田地図」(正倉院文書) には現在の大門池の位置に水沼池が描かれている。「水沼（みぬま）」の音の転靴に伴って、「弥満」あるいは「敏満」と用字も変化したらしい。大門池こそ水沼池であり、奈良時代につくられて以降、1260 年以上もの長きにわたって、当地の人々とともに歴史を刻んできたことが知られている。

ダムとしては、芹川ダム・四手川ダム・犬上ダムがある。

犬上ダム（犬上堰堤）は萱原地区にあり、昭和９年（1934）に起工された。戦時期の困難等を乗越え、昭和 21 年（1946）３月に完成した。日本最初の農業用のコンクリートダムであり、当時農業用ダムとして全国一の規模を誇った。

山間部の集落では、石灰岩を代表する岩石を利用して、狭小の土地の造成等に石積を多用しており、その堅牢な構造や意匠は地域の特色で、茅葺民家と石積の景観は独特の景観といえる。

石切り場跡や鉱山跡も点在しており、本地域の特色であり、近代化遺産として評価できる。

[写真 2-70] 石切場跡（大岡山）（大岡地区）

[写真 2-71] 住友セメント鉱山跡（後谷地区）

[写真 2-72] 住友セメント鉱山跡（原石山）（後谷地区）

（2）有形文化財（絵画・彫刻・工芸品など）

美術工芸品では、胡宮神社に伝わる重源上人が敏満寺に寄進した銅製五輪塔および紙本墨書寄進状、多賀大社に伝わる紙本金地著色調馬・厩馬図六曲屏風、もとは多賀大社の本地堂にあった真如寺の木造阿弥陀如来坐像が重要文化財に指定されている。

多賀大社には紙本著色三十六歌仙絵や天文 24 年（1555）刻銘の梵鐘、大太刀など滋賀県指定や町指定の絵画や工芸品等が多数保管されており、一般公開等を行い、奥書院見学と共に好評を博している。多賀大社での演能は中世の記録にも残っており、町指定の能面・狂言面が 72 面伝えられている。近江猿楽発祥の地であり、早くから能が行われていたと考えられる。

桃山時代の紙本著色多賀大社参詣曼荼羅図［図 2-29 次頁参照］は町指定となっており、参詣者の勧誘と案内を目的に描かれた。参詣曼荼羅図をもとに、坊人（ぼうにん）（修験者）の活躍によって、全国へと多賀信仰が広がったのである。他に、敏満寺関係の彫刻などが町指定となっている。

未指定であるが、江戸時代の多賀大社参詣曼荼羅図や光遍寺（後谷地区）の慶長 16 年（1611）刻銘の梵鐘（奈良の鋳物師 久怡（きゅうい）／弥左衛門（やざえもん） 作）も貴重なものである。

（3）有形文化財（歴史資料・書跡・古文書など）

書跡等では、多賀大社文書（鎌倉時代～江戸時代）および附として紙本著色多賀大社境内古図が滋賀県指定とされている。

胡宮神社には町指定の胡宮神社文書（鎌倉時代～明治時代）や紙本墨書重源文書重勧進状、仏舎利相承図がある。

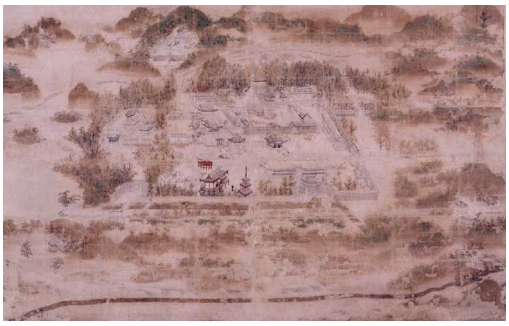
高源寺（楢崎地区）には村山たかの肖像画である紙本淡彩妙寿尼(村山たか女)像が町指定となっている。

他にも未指定であるが、安養寺（多賀地区）の慈性日記の抄出本（天台僧慈性による慶長 19 年から寛永 20 年にわたる記録）や個人所蔵の多賀神社祠堂建物図面などもある。

［写真 2-73］多賀大社の梵鐘

［写真 2-74］多賀大社奥書院障壁画二十七面の内の三面（富岳に松鶴図）

［写真 2-75］光遍寺の梵鐘（後谷地区）



［図 2-28］「多賀大社境内古図」
（桃山時代　多賀大社所蔵）

・多賀大社参詣曼荼羅図

参詣曼荼羅（さんけいまんだら）とは、中世から近世にかけて、勧進や霊場案内を目的として描かれた宗教画で、神社・仏閣の景観とそこに参詣する民衆の様子が写されている。

［図 2-29］は桃山時代に描かれた、多賀大社参詣曼荼羅図である。左右に大きな日輪と月輪を従え、右上に多賀大社の本殿がある。

神社を清流が囲み、太閤橋と呼ばれる木の反り橋を渡って門をくぐると、境内の向こうによく茂った木立を背に堂々とした風格を持つ本殿が建ち、厳かな雰囲気が漂う境内には、拝殿前に舞台、右に神楽所、左に護摩堂が立っている。

中央には門前町が描かれ、その下には、敏満寺及び胡宮神社、青龍山、飯盛木が描かれている。さらに右下には、大瀧神社の犬胴松の伝説である、大蛇に向かう白い犬と主人が描かれている。

このように多賀大社だけでなく、周辺の寺社仏閣、環境、伝承なども描き、多賀大社の坊人（ぼうにん）達によって全国津々浦々に語り継がれた。

坊人達は祈祷をおこなったり、多賀大社のお札を配り歩き、各地でこの図を広げて解説し、大社の創立や由来から霊験談などと共に名所案内までを絵説（えと）きしたとされる。そして多くの人々に勧進や参詣を勧めたことで、全国に多賀信仰が広まった。

［図 2-29］「多賀大社参詣曼荼羅図」（桃山時代　多賀大社所蔵）

（4）記念物（史跡・名勝など）

遺跡で指定されているものは、国史跡の敏満寺石仏谷墓跡と町史跡の大岡高塚古墳と楢崎古墳で調査報告書が刊行されている。

敏満寺石仏谷墓跡は胡宮神社から 150 mの青龍山山腹にある。中世墓地群で、石仏や石塔などが大量に出土しており、地域の石材を使った加工品が盛んに制作されていたことを物語っている。

楢崎古墳は直径 20 m程度の円墳である 1 号墳が復元され、史跡整備されている。

[写真 2-76] 楢崎古墳

この他、国の名勝として多賀神社奥書院庭園と胡宮神社社務所庭園が指定されている。

多賀神社奥書院庭園は護岸石組や築山の蓬莱石組に桃山時代の特徴が表れているとして評価されている。また、奥深い神苑が背景となり、深遠な景観を造り出している。

[写真 2-77] 多賀神社奥書院庭園

胡宮神社社務所庭園は、社務所座敷から眺めるように作庭されており、青龍山の傾斜地を利用した築山、山裾の水系を引き込んだ園池等、自然の地形や構成物を巧みに利用した庭園である。

・庭園

『滋賀県の庭園』(昭和60年)の調査報告書では、13 件の江戸後期から近代まで作庭された庭園が紹介されている。特に寺院の付属庭園が多く、池庭を有するものと流れのあるもの、２件の枯山水が知られている。

[写真 2-78] 胡宮神社社務所庭園

表門が著名な西徳寺庭園（多賀地区）は江戸後期とされ、高松寺（八重練地区）も同時期の池庭があるほか、開蓮寺庭園（木曽地区）は改造があるものの、これも江戸後期の池庭である。その他、専行寺庭園（土田地区）があり、これも江戸後期の池庭であるが、枯滝の意匠に優れ、鈴鹿の山並みを取り込んだ庭園である。同じ地区には、土田氏庭園があり、昭和１０年（1935）の作庭であるが、池庭背後に築山を設け、豪勢な石組を有するもので、家屋共に貴重な近代和風空間を残している。他にも個人邸の中川氏庭園（中川原地区）があり、江戸後期のものとされている。

[写真 2-79] 中川氏庭園

この数は、滋賀県においては、大津、彦根に続く庭園文化を有する地域で、個人邸の庭園がこれまで維持されていることも貴重である。

（5）記念物（天然記念物など）

天然記念物は、河内の風穴が滋賀県指定となっており、飯盛木２本、アケボノゾウ化石、井戸神社のカツラ（滋賀県下最大の巨木）が町指定文化財となっている。飯盛木の２本は樹齢 600-1200 年といわれ、その内の１本、女飯盛木はケヤキとしては滋賀県下最大である。

多賀大社の関係では、杉坂峠（栗栖地区）の御神木がある。御神木のスギは伊邪那岐命が降りたち、地面に刺した箸が成長したと伝えられており、３本立の大木である。滋賀県下最大のスギで、滋賀県の自然記念物に指定されている。

［写真 2-80］杉坂峠のスギ（栗栖地区）

・化石

四手地区から産出したアケボノゾウの化石は、全国で最も完全に近い形で発見された標本で、アケボノゾウを含むグループであるステゴドン科のゾウ化石では、アジアで２番目に産出部位の多い骨格として知られている。

山間部には、権現谷の化石など多くの化石産出地点が知られており、ウミユリ・フズリナ・三葉虫など海の生物が多く確認されている。これらの場所は安全確保の観点から公開活用が難しい状況であるが、博物館を拠点に調査活動を行い、活用に向けた計画をしている。

［写真 2-81］井戸神社のカツラ（向之倉地区）

（6）無形文化財・民俗文化財

町内では、無形文化財・民俗文化財に指定されているものはないが、多賀大社の「多賀祭り」「馬祭り」とも呼ばれる古例大祭は、鎌倉時代から継承されている。御神木の存在する山間部や敏満寺地区の御旅所を巡り、彦根市内も取り込む広域が一体となった祭礼である。この他に年間を通じて祭事は 106 件あり、祭事暦を未指定文化財一覧（P65）に掲載する。多賀大社を中心に能に関係する史料もあり、敏満寺は近江猿楽の発祥の地として知られている。また、町内の各地で行われていた「かんこ踊り」は、現在途絶えてしまっているが、もともと鈴鹿山系一帯に広く伝えられている雨乞いのための太鼓踊りの一つである。町内では、犬上川流域の集落を中心に行われていたようである。「中踊り」、「側踊り（がわおどり）」と音頭をとる「歌い手」に分かれ、中踊りの１名が太鼓を打ちながら踊る役で、その周囲を側踊りが竹製の楽器を持って踊る体型をとる。この他にも、伝統行事、おこない等の事例が存在していたことが判明しており、保存や記録が課題である。

・食文化

滋賀県内で、滋賀の食文化財５点（湖魚のなれずし、湖魚の佃煮、日野菜漬け、丁稚羊羹、アメノイオご飯）が滋賀県選択の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている。この内、湖魚のなれずし（鮒ずしやハスずし）や湖魚の佃煮は本町にも伝わる保存食の文化である。他に山間部の保存食や平野部にも食文化が残っており、地域の流通事情等に影響を受けている。